

礼拝プログラム ※主の導きにより変わる事があります

- 黙祷 エレミヤ 29:12-14a …… 御言葉に耳を傾け心を主に向けましょう。
- *賛美 …………… 13番 天には御使
- *交読文 …………… 31番
- *使徒信条 …………… 会衆一同
- *頌栄 …………… 40番 輝く日を仰ぐとき
- 礼拝のための祈り ……… 成田エクレシア:史執事 天声:小林伝道師
- 賛美 …………… 408番 父なる神の恵みは
- メッセージ …………… 「セラ」:逆転・反転のポイントを迎えよ(詩篇 32 篇)
- 御言葉を適用する祈り …… 会衆一同
- 賛美 …………… 409番 渴(かわ)きあえぐわが魂は
- 幸せと成功の宣言文 …… 会衆一同
- 献金感謝の祈り ……… パスター
- 報告 ……………
- *主の祈り …………… 会衆一同
- *祝祷 …………… パスター

天声教会は

- ・御言葉なる主の御声を忠実に聞く教会。(ヨハネ 1:1、マタイ 3:17、17:5)
- ・主の御言葉を心で信じて義に至る教会。(ローマ 10:10)
- ・全能なる主の御言葉を口で告白し、救いに至る教会。(ローマ 10:10)
- ・受けた恵みを愛と忍耐をもって実践する教会。(第二テサロニケ 3:5)

祝福の御言葉(下線にご自身のお名前を入れて宣言して下さい)

主はこう言われる、バビロンで七十年が満ちるならば、わたしは____を顧み、わたしの約束を果し、____をこの所に導き帰る。主は言われる、わたしが____に対していただいている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、____に将来を与え、希望を与えようとするものである。その時、____はわたしに呼ばわり、来て、わたしに祈る。わたしは____の祈を聞く。____はわたしを尋ね求めて、わたしに会う。

もし____が一心にわたしを尋ね求めるならば、わたしは____に会うと主は言われる。わたしは____の繁栄を回復し、____を万国から、すべてわたしが____を追いやった所から集め、かつ、わたしが____を捕われ離れさせたその元の所に____を導き帰ろうと主は言われる。(エレミヤ 29:10-14)

主に向くなら、主の栄光を塞いでいた諸々の覆いは取り除かれ、御霊にあって自由とされる。そして主の栄光を鏡のように反映させながら、主と同じ姿に変えられて行く(2コリント 3:16-18)。今年に入ってから、主に向いてそのような反転・逆転を経験する事を目指しているが、今回、詩篇 32 篇からその知恵を得たい。

人は誰しも、そむき(ペシャ:反逆)や罪(ハター:違反)、咎(アヴォン:捻じ曲がり)がある故に、災いという形の「責め」をいただく事がある(1-2 節)。幸いな人とは、主に赦され、罪を覆われ、咎を責められない人だ、とダビデは言っている。どんな人がその幸いにあずかれるか。 2 節後半をみると、それは「霊に偽りのない人」であるとして書いてある。霊に偽りが「ある」人とは、御言葉なる主から、または預言者から罪を指摘されて、本人自身もそれが罪だと知っていながらにして、それを認めず、取り扱いもせず、悔い改めもしないまま「黙っている状態の人」だ(3 節)。そのように霊において偽った状態であるなら、その人には主の御手が昼も夜も重くのしかかり、骨髓は夏のひでりのように渴き切ってしまう(4 節)。そういう状態の人は主に「黙っている」べきではない。たとえ喧嘩腰のような形であったとしても、真剣に主に向いて主を呼ぶべきである。

ヨブは、全財産と子供を失い、健康を失い、友人達から、あまりにも的を外した格言を押し付けられて、ついに怒りを爆発させた時、「神と論じ合いたい」と喧嘩腰で神に向かっていた。しかしたとえ喧嘩腰であっても、懇願的であっても、真剣に主に向かい合って行く時、その瞬間が、神と出会える重要な転換点となる。ダビデは主に対して黙っていた時、昼も夜も主の御手が彼の上に重くのしかかり、骨髓は渴き切り、うめいて、疲れ果ててしまった事を告白したが、4 節の最後に「セラ」という言葉があり、転換点を迎える。

「セラ」は音楽用語で、「1, Stop and Listen 立ち止まって聞け」「2, Change Key 音楽の音程(キー)を上げよ」「3, Change Mood 雰囲気を変えなさい」などの意味がある。つまりセラは、「反転」「逆転」のポイントに置かれる言葉である。私達のこの人生に「セラ」を置きたいなら、まずは立ち止まって静かに主に聞く事から始まる。主が発する小さな御声に耳を傾ける内に、暗く絶望的な雰囲気は、輝く希望へと変わって行く。『わたしは自分の罪をあなたに知らせ、自分の不義を隠さなかった。わたしは言った、「わたしのとがを主に告白しよう」と。その時あなたはわたしの犯した罪をゆるされた。セラ』(5 節) ダビデは主に向かつて言葉を発し、自身の咎を告白すると、主は赦して下さった。それ故、聖徒たちも皆、赦しを体験するために祈る。「主にお会いできる間」があり、それを過ぎるとお会いできなくなる、という「期間」がある。その期間内に主に祈って(パラル:懇願して)、主と会う民を「聖徒」と言う(6 節)。主に向かず、主と会わずじまいの人は、主の民ではない。しかしもし主に向くなら、栄光をふさいでいる覆いは取り除かれる。主に向いて主に折り、主と出会った聖徒は、救いの歓声に囲まれる。その「囲い」は強力で、大水の濁流さえ届かない(6-7 節)。

その体験をしたダビデは、再び「セラ」を迎え、今度は人々に教えるようになる(9 節)。あなたがたは、悟りのない馬や驢馬のようであってはならない、と。なぜ彼は、馬や驢馬を引き合いに出したのか。それは、くつわや手綱で強制的にハンドリングされない限り、決して動かない類の「聖徒」が多いからだ。そういう人は、災いや痛みに追い立てられない限り、主の言うことも、預言者の言う事も聞かない。そういう人には痛みが多い、とダビデは言う。聖徒たる者は、主とお会いできる間に、くつわや手綱で追い立てられないうちに、自ら進んで主と出会うために進み行くべきだ。まっすぐな心で主に信頼する人は、恵みに囲まれる(10 節)。

ダビデは最後に言う。『すべて心の直き者よ、喜びの声を高くあげよ。』(11 節)と。私達はいつも、主に対して「心の直き者」であるべきだ。たとえヨブのように喧嘩腰であっても。ヤコブのように、主と相撲をとる覚悟で真剣に主に向かつていくなら、主は喜んでその「相撲」を受けてくださり、間近で、生々しく、ありありと関わって下さる。そうして、主と「すったもんだ」した人は、それまで人の「かかと」をつかんで騙して生きてきた者から、「イスラエル」へと変えられ、主から祝福を受け、あらゆる脅威も、無効化される(創世記 32 章)。

それ故、私達は心の奥底から真剣に主に向くべきなのだ。あらゆる「じたばた」を止め、心静かに主に向かい、人生に「セラ」を、反転をもたらす私達でありますように！イエス様のお名前によって祝福します！

